



田中 玄 TANAKA RESIDENCE

1995年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

28年前、東京からロスアンゼルスに移住し、そこで生活と仕事の両方をマイペースで楽しんでいる田中玄さんという建築家があります。2003年の秋、大学のゼミの学生たちと、1940年代後半から60年代にかけてロスアンゼルスを中心に住宅ブームを巻き起こしたケース・スタディ・ハウスを見学を訪れたとき、コーディネーションとガイド役をしてもらい、無類の住宅好き（分かりやすく言えば「住宅オタク」）同士ということで意気投合した友人です。

このとき田中さんは、見学ツアーの途中で学生たちをゾロゾロ引き連れてレストランで食事をするのは大変だし、時間の無駄にもなるからと、自宅を開放してランチをサービスしてくれました。その日は大勢でドヤドヤと押しかけたので、田中さんが設計したその住宅をゆっくり見学することはできませんでした。天井の高い大らかな空間や、家の隅々まで自然光の行き渡るカラリとした室内の印象は、いつまでも記憶に残りました。このとき私は「ここにはきっとまた来ることになるだろう」という予感めいた気持を抱いたのですが、それが5年後にこのページの取材というかたちで見事的中したことになります。

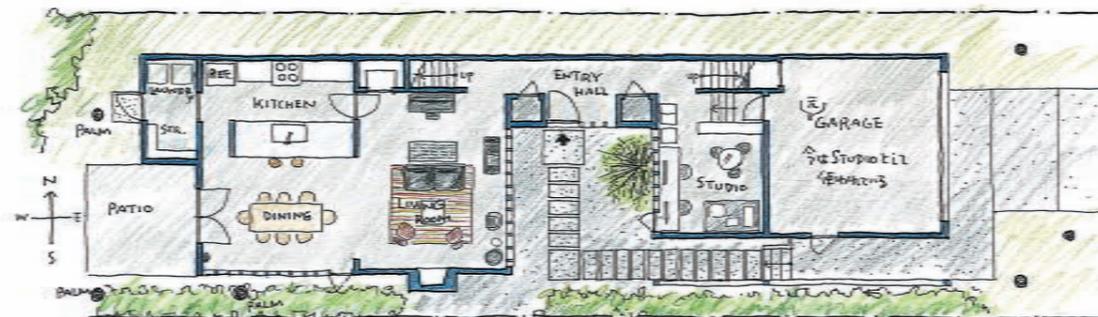
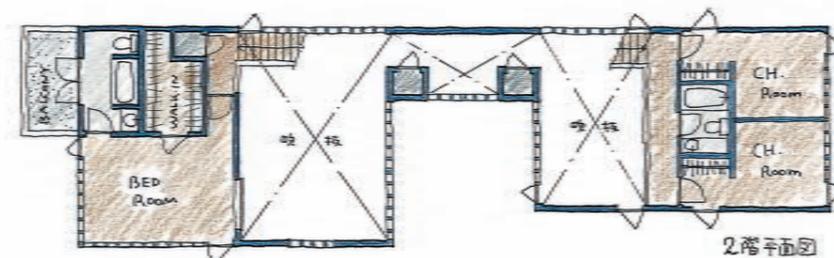
TANAKA RESIDENCE（田中さんからもらった図面のタイトルはそうなっていました）の敷地は短辺が道路に面した細長

い短冊形です。この細長い敷地の形状をどのように配置計画に生かすかが、設計の最初の課題になったと思います。田中さんは自宅です仕事をする「居職」ですから、住宅に仕事場が付随しています。田中さんはこの「うなぎの寝床」の敷地に住宅部分とスタジオ（事務所）部分をふたつの棟に分け、そのふたつを縦並びに配置し、棟と棟をエントランスホールで連結することでこの問題を解決しました。道路に近い棟にガレージとスタジオをおさめ、奥まった方が住宅部分です。入り口にアプローチするにはスタジオの脇をすり抜ける格好になります。

ここで、図面をご覧いただきたいと思います。住宅好きの読者なら図面を見て、「おやっ？」と、思いあたることはないでしょうか？…ありません？…では、ヒントをひとつ。ここはロスアンゼルス、かつてケース・スタディ・ハウスのメッカだったところ。もうお分かりですね、正解は、ケース・スタディ・ハウスの中でもひととき異彩を放つチャールズ・イームズの自邸です。TANAKA RESIDENCE の配置計画は、イームズ邸のたたずまいを彷彿とさせるのです。ここで急いで付け加えますが、こう書いたからといって、田中さんがイームズ邸を「真似した」わけではありません。縦長の敷地に用途の異なるふたつの建物を計画しようとし



敷地はイームズ邸にほど近い閑静な住宅地。温暖なカリフォルニアの光に包まれて気持ちよさそうにたたずむ建物*



TANAKA RESIDENCE 1階平面図
PACIFIC PALISADES CALIF.

たら、おそらく誰が設計しても同じような配置になるに違いありません。ただ、もう少し深読みすれば、イームズ・デザインをこよなく愛し、イームズ邸を住宅建築として高く評価する田中さんが、自邸の配置計画を通じてイームズへの敬愛と賛辞を込めたオマージュにしようとした、ということは大いにあり得ると思うのです。このあたりは、今度田中さんにお会いしたときに直接聞いてみることにしましょう。

ここからは田中さんの説明の受け売りです。そのつもりで読んでください。

ここに家を建てる前、田中さん夫妻はダウンタウンのロフトに住んでいました。そこは、床面積が250m²（75坪）もあり、天井の高い大らかな空間だったそうです。そこで田中夫妻はすまいと仕事場が一体になったのびのびとした暮らしを楽しんでいました。そんなわけで、この地域に土地を求め、家を建てることになったときも、最優先したのは「二人が十分な空気を吸って暮らせるスペース」（「括弧内」は田中さんの言葉です）だったといいます。しかも、この建物は、予算が限られていたこともあって、いかにローコストで、その目的を達成することが



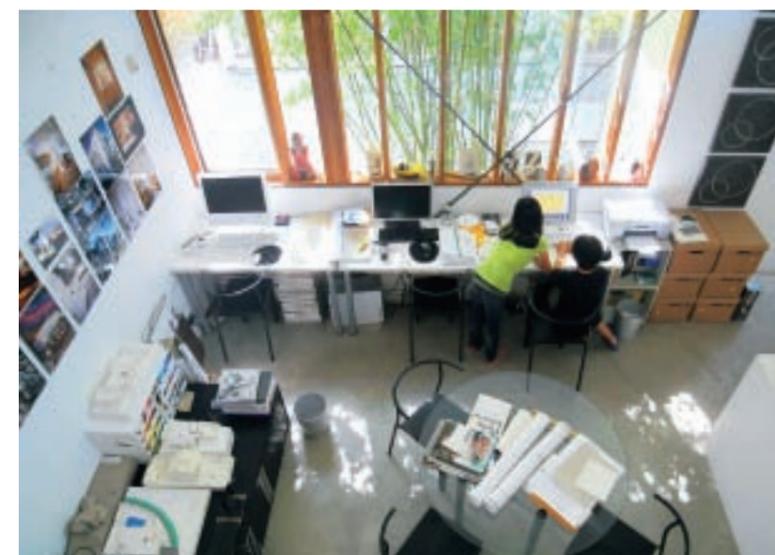
上—空間的にも気分的にもオープンな台所。ランチの時間は子供たちも積極的に手伝っていた。明るく、広々としていて「思わず手伝いたくなる台所」です
下—最初の写真の位置から見おろした Ken Tanaka Studio。子供室と同じ棟にあるので、子供たちは姉弟でこのパソコンで遊んでいた。父親の仕事場が子供たちの身近にあるっていうのも、なかなかいいものです
（写真2点とも：中村好文）



上—スタジオの2階コリドールから、スタジオを見おろす田中さんと私。田中さんの肘の真下にあるのが TANAKA RESIDENCE の模型*（写真：※印は Ken Tanaka Studio）
下—こちらは住居棟の2階寝室前のコリドールから見おろした居間の様子。イームズの椅子、ル・コルビュジエの寝椅子、アイリーン・グレイのサイドテーブルなど名作家具がゆったりとしたスペースに所を得て配されている。暖炉の右脇の壁に飾られている油絵は三岸節子作*



ダイニングルームから居間方向を見る。開放的でたっぷりとした高さのある居間は面積以上の広がりを感じさせる*





スタッド・ウィンドウが切り取る光と風。青空をバックにトレードマークのパームツリーが風に揺れていて、まさにカリフォルニア・ドリームそのままの光景*

できるかが、主要なテーマになりました。さらにこの地域には建築審査委員会があり、トタン張りの工場のような外観は認められない場所でもありました。つまり、ローコスト感を前面に押し出したバラック的な建築ではなく、それなりにお行儀の良い建物にしなければならなかったわけです。

しかし、田中さんは「ローコスト化の方法はきわめて簡単」だったとあっさり言います。それはただ「壁を作らない」、「特別な仕上げをしない」、「造作しない」、そして「窓枠を工夫すること」だったということです。その窓枠の工夫というのもごくあっさりしたものでした。普通なら間柱（スタッド）をカットして額縁状の窓枠を嵌めるわけですが、そうするとカット手間と額縁を組み立てる仕事が増えるので、間柱をそのままむき出しにしておき、外側からガラスを押しつけて固定するだけというもの。スチール・ロッド（丸鋼）の筋交いさえも隠したりせず、あえて室内に露出させています。

ところで、こう聞くと、読者は粗野な感じのローコスト建築を想像されるかも知れませんが、でも、実際にはまったくそんなことはありません。最初に訪れたときの、思わず両手をいっばいに広げて伸びをしたくなるような広々とした空間の印象は今も変わらず、部屋の隅々まで光が溢れ、ゆったりとした時間と空気がたゆたうその居心地の良さは独特です。広々とした空間のしかるべき場所に、家具の名作や、色鮮やかな敷物や、とりどりの雑貨や小物が注意深く配されて、空間にアクセントを加えています。むき出しにされた素地仕上げの間柱も、見る角度によっては縦格子のように見えて、日本的な雰囲気さえ醸し出しています。

こうした田中夫妻による「しつらえの効果」を目のあたりにし、さらに、建築家、田中玄さんの深いところを流れているに違いない「住宅は簡素な箱であればいいのだ」という揺るぎない信念を垣間見ると、私は、またしてもイームズ邸を想い起こさずにはいられません。妙な表現ですが「イームズ邸の甥っ子がここにいる」という感じがして仕方がないのです。

さて、この住宅の中を歩き回っていて、私がとくに「いいなあ」と思ったことがみつあります。そのひとつは、スタジオ棟の仕事場から2階の子供室に上がる階段と、住宅棟の居間から2階の主寝室に上がる階段が、幅が狭く高い吹き抜けを持ったエントランスホールを挟んで「V字状」に向かい合っているところ。どちらの階段も昇りきったところで振り返ってみると、そのダイナミックな空間に目を奪われます。玄関ホールの左右にあるコートクロゼットが狭さと高さを強調して見事にクレバス的な効果を上げているのです。

ふたつめは、先ほども触れた間柱をそのまま露わしにしたFIX窓（私はひそかに「スタッド・ウィンドウ」と命名しました）です。このスタッド・ウィンドウがカリフォルニアの空や、光や、風を切り取って見せる視覚的な効果は TANAKA RESIDENCE の見どころのひとつです。凝ったディテールの窓では、これほど軽やかにカリフォルニアの空気を切り取ることはできません。

みつめは、家中のいたるところに絵が飾られていること。たとえば、居間に足を踏み入れた瞬間に、暖炉脇に飾られていた絵がいきなり目に飛び込んできて「むむむっ、あれは？」と、思わず私はその場でフリーズ状態になったのですが、それは三岸節子の油絵でした。あとから聞いた話ですが、TANAKA RESIDENCE に飾られている絵は全部で32枚だそうです。このようにごく自然に絵と一緒に暮らしている様子を見てみると、田中さんの父上が著名な洋画家であることが否応なしに思い出されます。家庭環境というのはやはり大きく影響を及ぼすようですね。

さて、最後にふたたび、田中さんの言葉で、この見学記を締めくくりたいと思います。

私にはこの言葉が、TANAKA RESIDENCE のすべてを、簡潔に、かつ等身大に語っていると思うからです。

「私が常に目指すのは、カリフォルニアの乾いた空気と、澄んだ光を十分に取り込んだ裏表がない健康住宅です。日本からやって来て、カリフォルニアのライフスタイルを楽しんでいた私たちには、大勢人が集まって楽しい家、十分な空気が確保できるヴォリュームのある家、パーティーをすると必ず人が集まるキッチンが裏舞台にならない家、そんなイメージがあったと思います」。



著名な画家、彫刻家の作品がズラリと並んだ玄関ホールはさながら絵画ギャラリー。鮮やかな色の作品は、この家の空気によく似合います*

なかむら・よしふみ——建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972～74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976～80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、「住宅巡礼」（新潮社 2000）、「意中の建築上・下」（新潮社 2005）などの著作がある。